ビブリア

発行　いわき市平上荒川字長尾30
　　福島工業高等専門学校
編集　図書委員会
　　昭和63年3月1日

No. 63

福島高専 図書館報

◇ 巻頭言 ◇

"銀の匙"と"帝都物語"

土木工学科教官　志賀宣郎

昨年，岩波書店は文庫創刊60年記念事業の一つとして，各界を代表する人達に，60年間4360点の中から心に残る，他の人々に勧めたい本3点を選んでもらった。三百人をこえる回答の中で最高の20名の人達が選んだのが，中勘助著の"銀の匙"である。(第2位は"福翁自伝"17名)。「すき通ったきよらかな」「心の洗われる」「珠玉のような純粋な美しさ」等々，子供の目を通した，子供の心そのままのキラキラした文章が190頁程の小冊子にぎっしりつまっている。

さて一方の"帝都物語"は荒俣宏著，カドカワノベルズから角川文庫へ移行しての全11巻の大作，現在映画化もされて上映中である。平将門に始って大隈重信，西郷隆盛，渋沢栄一，後藤新平，幸田露伴，泉鏡花，森鴎外，寺田寅彦，そして三島由紀夫，角川源義・春樹等と著名人が数多く登場，いずれもそれらしく活躍し，東京の都市問題をからめてその迫力は驚きである。荒俣宏は最近テレビにもよく顔を見せ，その博学ぶりを披露している。このような作品が生まれて来たことについて少しく考えて見たい。最近の小説の中には，例えば小松左京の作品のように，工房?に多くのスタッフをかかえて資料を集成するといった例が多いようである。しかし"帝都物語"については，著者の経歴等から見て，又新しい作家のパターンが生まれて来ているように見える。彼はもともとはコンピュータープログラマーであり，その後幻想文学翻訳研究家と云われていた。従ってこの作品はコンピューターによる資料検索が大量の素材を作品の中に取り込むことを可能とし，かつ一人でしかも短期間に大作を完成させることを示しているといえる。

現在"銀の匙"は昭和10年の初版以来第78刷となっており，岩波文庫の中に必ずこの一冊を見つけることが出来る筈である。一方の"帝都物語"は書店にあふれ，しばらくはベストセラーの中に入っていることであろう。このような作品が生まれたことは，今後情報処理技術の高まりの中で，それぞれの時期，世相に最もフィットした大作が，次から次へと出現してくることが予想される。このような時期に居合わせている我々には，"帝都物語"のような作品に触れることの喜びを味わう一方で"銀の匙"のような作品をそれぞれがさがしあて，座右の書として心のよりどころとすることが必要ではなかろうか。

"銀の匙"が教科書から消えてもう10年以上になるという。"匙"という字が読めない学生も相当いるようである。さがす手段はいくらでもある。月に1回は本屋に数時間という習慣は如何なものだろうか。

目　次

巻頭言 …… 1
随　想 …… 2
私の読書 …… 8
学生卒業研究一覧 …… 13

隨　　想

「私のデビュー戦」

機械工学科教官　菅　原　卓　夫

今から数年前，私も立派(?)に学校を卒業し某会社に就職した経験がある。そんな数年前に立ち返り，教育菜園から社会鍋に放り込まれた新入社員の体験から，２・３の事柄について気のむくままに筆を走らせる。

１）５Ｗ１Ｈ

初出社から数日後，社の幹部と新入社員との昼食会があった。幹部とのということも手伝って，かなり緊張し，胃が少々痛かったことを，今でも覚えている。緊張印の昼食を，やっと平らげたと思ったのも束の間で，幹部の一人が，「一人ずつ学生時代の思い出を，ごく手短かに話してくれ。」などと，ニヤリ言い出した。全く，世の中には，イヤな奴が必ずいるのである。その幹部の説明は，要するに，５Ｗ１Ｈを活用した簡潔な発表の中にエピソードを加えたものを，この場で，即興でやれというのである。幸か不幸か，テーブルの末席に位置していた私は，最後の指名になる様子で，少々胸をなでおろした。

トップバッターが，場内のざわめきの中で，さりげなく終了し，２番手が，手堅くバント（自己紹介のみ）、３番手もまたバントというような早い展開で，着実に自分の番が近づいてきた。心臓は，ドッドッと早鐘の如く鼓動し，その音が，周囲に聞えるのではと自分でも驚くほど上っているのがわかった。学校と違ってチャイムの音で救われることもなく，果して，私の番になった。明らかにヒットを望んでいる幹部の耳と目，ちょっと前に手堅く出塁してしまった同期の安堵と哀れみの目，気がつくと席を立っておじぎをしている自分がいた。「私は，材料が専門で……(中略)……，親父が，材料のプロなら，この鉄瓶の錆を落とせるか……(中略)……プロの二文字に動揺し，これが最初の恩返しとばかり……(以下略)」場内のささやかな拍手が，いささかの救いでした。

２）１日10分考

私の入社した会社だけなのかもしれないが，入社後約半年間は，毎日，Ｂ５判１枚の業務報告書を提出することになっていた。とは言っても，入社後間もなくのこと，大した業務に携っていることもなく，その内容は，貧困そのものだった。１日の行動を文章化するのは，意外に大変な作業で，今日一日とてもがんばったな，と思う日でも，文章に書くと，何をがんばったのかわからなくなる事もあり，こんな日のＢ５判は，タタミ一畳ぐらいの広さに思えて，机の上の報告書を前にウーン，ウーンと悩んでしまうほどだった。

そんなことに嫌気がさしたある日の朝，いつものように駐車場から事務所までの間を歩いていたとき妙案を思いついた。毎朝10分間は，必ず歩くのだから，その間に今日の仕事をスケジュール化してしまえば，退社時間にあれこれ考えるよりずっと楽ではないか，朝10分間に考えたスケジュールが，その通りに運べば，その内容に従って，報告書を仕立てればよく，運ばなくても，スケジュールが何故狂ったかの理由を書けば良く，この日を境にして，明るい退社時間(少々オーバー)が，私を迎えるようになった。

３）ホウ・レン・ソウ

ホウレンソウとは，ポパイの好きなほうれん草ではなく，上下の報告，左右の連絡，腹を割った相談の一文字を取った，報連相のことである。組織社会においては，"ホウレンソウ"が大切で，例えば，"ホウレンソウ"の"ホウ"が抜けると"レンソウ"になり，勝手な"連想"が働いて，いい加減な判断となるし，また，"レン"が抜けると，"ホウソウ"放送となって，上からの一方的な話になってしまう。最後に"ソウ"であるが，抜けると"なんみょうホウレン"となり，お題目ばかり，建前ばかりで，"相談"のない心の通わない組織になってしまう，ということで，この"ホウレンソウ"は，今でも，仕事信条として大事にしている。

以上，自分の垣間見た社会での体験談を，漫筆したけれど，賢明なる将来の技術者諸君が，この中から何かを感じとってくれれば幸いです。

"自分の考えを正しく伝えよう"

電気工学科教官　奥　村　陽　彦

自分の考えを正しく人に伝えるということは難しいことである。私達は，社会の一員として，集団の一員として生きて行かねばなりません。周囲の人々と，どのように係わり合うかということが，その人の一生を左右するといっても過言ではない。

"沈黙は金なり"と男子たるもの，寡黙をもって良しとする諺がある。"以心伝心"と，自分の気持を言葉でなく，心で伝えるという諺もある。技術者は，"測定器を扱うのがすぐれていれば，話が下手でも良いのだ"という人もいる。

しかし自分の考えを，きちんと表現し，人に伝えてゆくことは，大変重要なことと思う。

家庭では親子との間に，社会では，上司や同僚や部下，友人との間に，学校においては，先生や友人との間に，いかなる場合においても欠かせないものが，円滑な会話であり，意志の疎通である。

最近の国際化社会では，外国人に接する機会も多く，このことは，益々重要になって来る。

数年前，話力を向上させる講習会に参加する機会があった。それは，日曜日であったが，それにもかかわらず多くの人が参加していた。驚いたことに，二十才前後の女子学生や，会社員，会社社長，医師，店員さんなど，若い人から年配の人まで，男女を問わず真剣に参加していた。長時間にわたって，決して安いとはいえない受講料を自費で，自己研修のために受講していた。それらの人々は，話ができないからというよりも，より向上しようという人達のようにみえた。

話力があるというのは，決して上手に話をするとか,うわべの言葉だけを並べれば良いというものではない。

豊かな人間性，密度の高い内容力，その場に即した対応力などが必要で，やさしいことではない。

最近では，テレビ，パソコン，ビデオなどと，会話を要しないで一人で楽しむ時間を持つ機会が増えている。

会話の始まりは,先ず挨拶である。朝夕の挨拶が出来ないようでは，確かなコミュニケーションができる筈もない。

どんなときでも，どんな所でも，きちんと挨拶ができることである。それには，普段から身につけていなければ，直ぐには出てこない。

先日，一流企業で活躍している本校の卒業生は，「技術者だから，余計自分を表現できる力が必要なのだ」と述懐していた。立派な業績を残し，その道でのリーダーになられた技術者の方々は，人を説得し動かしてゆく力があり，又，その労を惜しまなかったからではないだろうか。

無限の可能性を秘めた学生諸君の雄飛を願って，これからの実行を期待したいものである。

詩

ある１年生

あかり

部屋の中に　ひとりいる
動くものは　何もない
目を閉じてふうと深呼吸をする
聞こえる
海鳴りが聞こえる
耳をすます
砂がかたる
　学ぶことは　がんばれよ……
　汗を流すことは　がんばれよ……

窓の外をみる
闇に灯台のあかりがみえる
あかりが光る
　守る　船を守る
　励ます　漁師を励ます
　慰める　友を慰める

心もとなくても
ひそかであっても
あかりをともす
心の中にあかりをともす
そんな人でありたい……

雪

雪は消しゴムそのもの
降りゆく先のもの
すべてをおおいかくす
戸を開くと　おもわず手で光をさえぎる
「きれいだ」
そう思うのも　僕はつかの間
雪にはなるな！
人の心　雪になったらおしまいだ
みにくいもの　きたないものすべてを
かくしてしまう雪にだけは
絶対になってはいけない

冬の風

冬将軍が戸を叩こうとも
時が足早に過ぎ去ろうとも
僕は眠りから覚めない
覚めようとしない

眠りの中で　僕を嗤り
意気地のない奴とあざ笑ったのは
あれは　もう一人の自分……

目を開くと　真白な壁が
僕を冷やかに　取り囲んでいた
時を刻む音にびくりとして
「しまった」と思った時
心の中で　もう一人の自分が
寂しく　呟いた
「みんなもう　行っちまったよ」

しばらくして　窓を開けた
冬の風は　冷たく心を突き刺し
甘えた心を　さらっていった

ありがとう

そんな心は遠くへ運んで
そして　海に溶かしてしまえばいい

生まれ変わったような僕を
心地好い緊張が迎えてくれた

時の流れが
さっきより　遅くなったような気がするのは
あの　風のせいなのか
冬の風のせいなのか

日本・日本人

土木工学科　1年　木　村　静　栄

日本という国は，世界の中で注目されている国の一つである。円高問題・ココム違反事件等々。あまり良い意味で知られているとはいえないが，注目されているのに変わりはない。世界が日本を見つめ，より深く日本という国を知ろうとしているとき，日本人である私たちが日本をよく理解していないということはおかしいことではないのだろうか。アメリカなど他の諸外国のことに目を向ける前に，少し日本という私たちの住んでいる国について考えてみたいと思う。

海は日本を大陸から分離した。そんな地理的条件が，日本をタコツボにしたてる。外国人が日本へ入国するのは非常に困難だった。だから日本に外国の文化が移入されるのは珍しいことだった。そしてそのわずかなチャンスを日本人は決して見逃さなかった。

「漢字」という名の示すとおり，私たちの使う文字は大陸産である。「カタカナ」もその「漢字」の一部だし，「ひらがな」も「漢字」の略字に過ぎない。

私たちの意思を伝え，私たちの文明を創り出し，私たちの文化を残す言葉の文字が漢字からできあがっている。私たちの文明は，その始まりから借りもので作られたのだろうか。日本人は外国の文明の方をより価値があると見るのだろうか。

日本人の心の故郷とまでいわれる「京都」「奈良」の二大古都もまた，大陸文明の輸入の最先端の街だった。現在の「東京」「大阪」「神戸」「横浜」のように，外国の文化に敏感に反応していたはずである。

日本人の心が古都にあるという表現は，ある意味で正確である。そこは昔，文化の入り込む窓だった。当時の最大の「お手本」中国に近づくようにと，若い意志で生み出された街だからだ。

巨大な寺社が，大きな仏像が，新宿の高層ビルと似ているというのは言い過ぎだろうか。琵琶をつまびき漢詩を吟することと，エレキとロックを好むことが同じ趣向から出ているとは言えないだろうか。

日本に外国の文化が移入されることはまれだった。文化を移入するのが困難だったため，日本人はわずかのチャンスに命をかけた。遣唐使は命をかけて海を渡った。日本ではない外国へ行くために。そして外国から何かを持ち帰るために。

外国から入ってくるわずかな文化・文明を大切にする感情が日本人にはある。少ないからこそ大切にする。日本は，入り口の狭いタコツボのようなものに思える。

日本に入国した外国人が国外へ出るのは難しかった。日本人の貪欲なまでの執着心が，一度内側に取りこんだものは外へ出すまいと主張しているかのように見える。

宗教戦争は世界史の舞台をにぎわせている。現在も，イラン・イラク戦争では多くの人々の命がうばわれ，この地で生まれた不幸な子供達は，小さいころから戦うことを教えられ，生と死の間で生きている。そんな世界の中で，日本には多くの神が並立している。日本史上，キリスト教などいくつかの宗教は時の権力者に迫害されたにもかかわらず，キリスト教・仏教，おそらくはヒンズー教までも，日本という島国に共存しているのである。

神社と寺が私たちの生活の中に根づき，教会が日常生活の中に溶け込んでいる。クリスマスにはサンタが走る。(師走の町を走るのはもともと僧侶のはずなのに)年内には御歳暮が終り，除夜の鐘が鳴ると初詣に出かける。そして「おみずとり」が終るとやがて「花祭り」。十三日の金曜日を嫌い，同様に仏滅を考えていないわけでもない。宗教による年中行事や風俗は，対立もせず，たて続けに消化されていく。厳密な意味での宗教は日本には存在しないのかもしれない。ただ多くの宗教が日本にあることも事実である。まるで入ってきた宗教が出ていけなくて，日本に残ったかのように。

日本に入ってきたときの「漢字」はまさに「漢の国の字」だったのかもしれない。けれど，日本の漢字は漢の字ではなく，日本の文字である。「カタカナ」も「ひらがな」も日本で作られた文字である。日本で変形された文字なのだ。

使用文字として「漢字」に目をつけた日本人は，それを「日本の漢字」の種として採用した。種を育てていくのは日本人の才能である。今や漢字は日本人に使いやすい文字として定着している。

タコツボの中に落ちてきた大切な小さな種を，日本人は大切に育て，日本人に合うように育てたのである。

宗教もおそらくは，外国にあったときとは違うものになってしまっているのかもしれない。

サルマネという言葉が日本人を形容するのによく使われる。たとえサルマネという言葉が日本人を軽蔑するように使われたとしても，気にするようなことはないと思う。半分は当っているし，あとの半分は長所と思えばよいからである。

外国の文化をそっくりそのままコピーするのであれば，ほめるところはない。しかし日本人のサルマネは少し違っている。本家からまねてはくるが，日本の中で変形され，別のものになってしまうのだから。

タコツボの底にあるひとつぶの外国製の種をよく観察し，日本の水と日本の土で，日本にあうものへと育てる。それはもう，日本製の文化になってしまう。完全に大陸から分断された国だからこその特質であるといえるだろう。

入口と出口の狭いタコツボのような地理的・心情的条件をもつ日本の文化は，限られた外国文化を貪欲に吸収する。古来日本風，または日本的と言われ続けた日本の歴史的財産の中にも，この特色は色濃く現れている。

しかし，単純に外国のものをそのまま導入したわけではない。外国の文化は日本に入り，良い意味でも，悪い意味でも変形されている。そして，日本によって作られた日本独自の文化となる。

恥をかくことが死ぬことよりもつらいことだと考えたのは江戸時代の武士。しかし多かれ少なかれ，私たちも同様の気持ちを持っているのではないだろうか。

「他人様が見ていますよ」「先生が来ますよ」……などの言葉が氾濫している。そして，その言葉が効果を生むのは，私たちが日本人であるからにほかならない。

「公と私」という言葉の表す意味は，もっと深いところにあるとしても，私たちはいつも，「公」の場を気にしている。他人の視点によって自分を測ろうとする。ものごとの正しさの規準は多数の目にあるということかもしれない。

この日本人の心情を評価する人々は，身を律し，個人よりも公を大切にする人情を「おくゆかしい」と呼ぶ。

しかし，批判的な目で日本人のこの姿勢をながめる人々は「他人の見ていないところでは何をするか分からない日本人」的な評価をする。"日本人は，陰で何をしているのか分からない。ただ世間に悪事が発覚したときには，厳しく責任をとる。だから，世間に何ごとも隠そうとする。それを『おくゆかしい』とは笑いごとだ"と見る人もいるのだ。

恥の文化の評価は分かれる。恥をおそれるから，正しい行為を貴く。逆に，恥をかかないために表だけをつくろうとする。しかし，私たちはここで，どちらにもかたよってはならないのである。ただ良かろうと悪かろうと日本人は，「恥をかかないこ

と」を心がけていることをここで再確認すべきである。

日本人は，真実をおおい隠そうとする。別の視点にたてば，日本人は幾重にも重ねられた奥にこそ真実があると考えられているとも言える。

一般的な西欧の考え方を逆に進んだようなこの考え方は，西欧との天候の差によると語ったのは，故斉藤信治氏だが，この考え方によると，

"西洋思想の素，ギリシアの天候は，空はあくまでも澄み，はるか遠方まで，見渡すことができる。視力のあるものは，はるかな山の，そのまた先の空まで見とおす。それに対し，東洋，日本の空は，特に春の空に代表されるように，おぼろげこそ美である。あのカスミの向こうに何か正体の知れない真実がある。つまり，西欧の真実は，つつみ隠さないこと，明らかにされることであり，日本の真実はおおい隠されたものが，明らかにはされないことにある"

というのである。

どちらが正しいかは，今は問題ではなく，それはそれぞれの主張によればよいとして，ここでは日本人の心情が，隠すとか，おぼろげとかいうところにあるということを確認しておこう。

直接な表現を嫌い，婉曲に婉曲にというのが真情であるのもうなずけるところだ。

最後に，日本の美意識について考えてみようと思う。

日本の庭園は単に海や山を表すばかりでなく，宇宙全体を表現していると評価されて久しい。また，山水画の黒の線が雪までを表現することは周知のことである。

抽象という言葉が，様々の含みをもっているとしても，日本人は余分なものを捨てていくことに美しさを認める力をもっている。

砂と石で水を表現し，スミという絵の具で白いと，また赤いと思わせるほどの表現を可能にするのは，この捨て去るという作業だ。単純の中に，複雑と広さを収めてしまうのである。

日本の美意識をひとことでまとめるのは難しいが，単純性，抽象性，縮小性の三点を意識していると断言していいだろう。

以上，全てとはいえないが，様々の観点から日本人や日本を見てきた。このような事実をふまえて，これからの日本をみつめていきたいと思う。

心の目

機械工学科　1年　佐藤　豊

木造の古い駅を出ると目の前に田んぼがひろがっている。この中につづいている小道を十分ほどすすんだ所に一軒の家が建っている。

いまだに手押しポンプがついた井戸が庭のまん中にでんとあり，庭先にはチャボがはなしがいになっている。まさに農家の家である。ここが俺のじいちゃんの家である。

じいちゃんは去年，脳そっちゅうでいってしまったので今はばあちゃんの家となっている。俺は毎年，夏には「里帰り」と称して遊びに来ているのである。目的はいろいろとあるのだが……。

家の扉を開けると「ばっちゃーん。」と大声で呼ぶ。ことわっておくが，いまだ耳は遠くない。「おお，もう来たか。あがれ，あがれ。」と奥で声がした。とうぜん，えんりょなくあがらせてもらった。

しばらくして，ばあちゃんが出てきた。「さっきろうかのつきあたりの部屋かたしておいたげに，荷物さ置いてこう。もう夕飯時じゃ。」……年寄りの夕飯は早い。まだ外はうす明るいというのに，夕飯といいだすのだから。

夕飯を食べながら，ばあちゃんが突然話しだした。「ふぃひぃふぁ。」「食いながら話すなよな。」そう言うと，ばあさんはあわててのみこみ，一息ついてから，じろっとこちらをにらみ，一言「美樹さん……。」小さくつぶやいた。俺が「な，なんだよ。」と言いかえすと，さらに迫力をこめて，「お前、あの娘さん好きなんじゃろ？。彼女来月……結婚するんじゃ。」ここまで言うころには，ばあちゃんの目は血ばしっていた。「血管切れっと。」と忠告すると，「何言っとんじゃっお前彼女とられてもええんかっ。」血走った目でさらに立ち上がり怒鳴り始めた。俺は「ごちそうさん。」と一言いって自分の部屋にかけこんだ。翌日わかったがこの時には酒が入っていたらしい。

翌日の朝，（といってもすでに短針は十の文字の上にいたが）ばあちゃんが突然，「近くの神社さおまいりに行ってこい。」と言いだした。前のように血圧は上がってなかったが，やれやれ老人は，何考えてんだか分からないものだ。けっきょく，昔の悪友の家が近くでそこについでによってくることをふくめ，話は決まった。神社へ行くには，と

ちゅう川を渡らなければならなかった。川といっても，ようするに，用水路である。ここの水は，町の川とは比べものにならないほど，水がきれいで，冷たかった。川上の方ではいくつかのスイカ，うりが冷やされていた。川下からはゴシュゴシュといまだに洗たく板を使っている光景が見られる。なつかしさを感じ，神社というものを忘れかけた。そのとき，俺の後でなつかしい声がした。

「お久しぶりです。」女の声……である。当然，ばあちゃんではなかった。おそるおそる後ろをのぞいて見ると，そこに立っていた人は，先日のさわぎの元となった人物だった。

ばあちゃんのさっしどおり，俺はこの人が好きだった。今でも好きである。それだけに前の一言は非常にうれしかった。一年に一カ月たらずしかこちらにいないこの俺のことを彼女がおぼえてくれていた。それだけで，うれしかった。

「ど，どうも。」何か言わなくては失礼だと思い，急いであいさつを言った。しかし，どうもほれた人の前では勝手がちがう。この場を自分としては去りたかった。彼女の結婚についても話したくはなかったことも理由に入っていただろう。とにかく，この場を脱出したかったのである。

俺はおもむろに歩き出した。この前に，「ちょっと用事あるからまたね。」とか言えばよかったのに無言であった。そのため，彼女も俺と並んであるきだしてしまった。ようするに歩きながら，話すことになってしまっただけであった。

十分近く，時が過ぎた。俺は結婚話以外の話題をさがしていた。このとき，彼女は何を考えていたかは知らない。ただ，そのときの彼女の顔がみょうにさびしげだったことは，おぼえている。

「私，結婚するんです。」彼女は小さな声でいった。小さな声ではあったが，しっかりした一言だった。やはり本人の一言は他人の一言よりはるかに人の心をゆさぶった。俺は自分の血の気が引いていくのを感じた。

今ならまだ，この人の胸のうちを聞かせてもらえる。告白すればまだまにあうんだ。一言，「好きです。一緒に来てください。」とたった十三文字を口から出すことができなかった。そんな自分にいらだちを感じずにはいられなかったのである。

勇気をふりしぼり，「あの……。」まで口から出た。もうすこしである。「あの，……おしあわせに。」とても口にはできなかった。俺はまだ学生である。人をやしなう力も，なにも持っていなかった。それが決心をにぶらせたのである。

彼女はこの一言を聞いて「ありがとうございます。」と，一言だけを言いのこし，用事があるといって去っていった。

むなしかった。告白できなかった自分がみじめだったし，俺の一言を気にもとめなかった様子から，自分の片思いに気づいたからでもある。「失恋かぁ〜。」なさけないセリフが口からこぼれた。

「なさけない」ばあちゃんがおかずのたくあんをかじりながら，口走った。もう夕食どきである。「あれだけのチャンスをのがすとは……あ〜なさけない。」「ばあちゃん見てたのか。」「全部な。」コリコリとたくあんの音がして，「おめっどうして告白せんかった。」おち着いた口調でいった。「だって，俺，学生だから……。」「だれも結婚しろとは，言っちょらん。告白せねば，互いに心にわだかまりが残る。そうなるなというこった。」「まじですね。」「あたり前じゃっ。」

「結婚は来月，お前が来てとめてくれるのを待っていたともとれるな。」「勝手なとり方だ。」「勝手じゃと。」「そうだろう。」「そうかもしれん。しかし，心の目で彼女の心をのぞこうとしなかったお前のほうがよほどひどいぞ。」「のぞこうとしたよ。」「いんや。もしそうなら告白して思い出として残るか。それとも，告白せずに，相手の心をくるしめるか。どちらかを選たくしまちがえるはずがないっ。」俺はここから言いかえすことができなかった。ばあちゃんはむちゃくちゃな部分もあったかもしれない。しかし，告白しないことが必ずしも相手を傷つけないとはかぎらないのである。そのことをばあちゃんの言葉から感じたのである。

翌日，彼女の家へ行ってみた。しかし，彼女はるすだった。しばらく帰らないということだった。

「まっ，お前の一言を待っていたのに期待を大きく裏切られたことでこの里にいる必要もなくなった。というところじゃろ。」ばあちゃんはあいかわらず勝手であった。

俺は，それから毎日のようにたずねてみた。

「お前，学校を休んで，式に出てみるか。わしの招待状もあるしよ。」ばあちゃんがいってくれたが，それではおそすぎるのである。

最後の日，トランク片手にたずねては見たがけっきょくは，「まだ帰ってきてませんけど。」と彼女の母さんの言葉が返ってくるだけであった。

「まったくこのかいしょうなしがっ……。」駅のホームまで見送りに来たばあちゃんがつぶやいた。「どうしても結婚式へはいかんのか。」「ああ，あんなところで『好きだった。』なんて言うのは，軽薄な

奴らだけだよ。」「そうか。しかしな……。」「いいよ。軽薄人間になってこれ以上彼女の思い出をこわしたくはない。」だまってばあちゃんはうなずいてくれていた。

これは家についてから気がついたのだが，ばあちゃんが突然俺を神社へ行かせたのは，彼女と会わせるためだったのではないだろうか。「苦労かけたな。ばあちゃん……。」思わずつぶやかずにはいられなかった。

あれから一週間が過ぎる。ばあちゃんから手紙もとどいた。

手紙では彼女について一行もふれてはいなかった。両親に知られるとうるさいことと，まだ，気にかけてくれているのとだろう。

ついさっき，ふうとうにもどそうとして，そこに一枚の写真が裏からはりつけてあるのに気が付いた。

当然それは，彼女の結婚式の写真だった。しあわせそうにほほえみながら泣いている。

ふつうの人がふつうの目で見れば，しあわせそうな花嫁である。しかし，俺の心の目で見るとさびしげな涙のような気がしてならない。

これはわだかまりの証拠なのだろうか。

私の読書

「こころ」を読んで

電気工学科　1年　岡　　宗　法

人間の心は残酷である。しかし，それが人間の運命であると思う。一個の人間が人生のうちで，人間の心のみにくさ，自分自身の残酷さに気付いた時，その人間自身，すっかり変わってしまうのである。

人間を疑いはじめ，決して心を許そうとしない。主人公の「先生」は，この世でたった独りになったとき，信頼していた叔父に裏切られた。ある意味では，これは一人の人間が死ぬよりずっと大きな衝撃にちがいない。

そして，「先生」は，まさしく人間不信に陥ってしまうのだが，「先生」にはまだ，小さな，そして大きな希望があったのである。それは，「自分自身は，あんな人間にはなるまい。いや，あんな人間であるはずがない」という希望だった。

「先生」は，この時自分自身しか信じていなかったのである。

「先生」は，青春の真ん中にいた。人を愛し，憎み，嫉妬する心の成長期に。

もし，もしも「先生」が，この青春時代にいなければ，「先生」は最後の最後，あまりにも哀しい"死"を選ばずに済んだかもしれない。

なぜなら，人生の中で，青春時代とは，他人をいくら傷つけても，本人は気付かないものなのである。懸命になればなる程，自分を追いつめてゆく事も解らないのである。そしてある時，それに気付いた本人は自分自身の身勝手さや，思いあがり，ただの自己満足に涙することになるのである。

そして，いわゆるそれに近い何かによって「先生」の友人Kは自殺することになってしまうのである。Kもまた「先生」も，一人の女性を真剣に愛していたというのに。

そうなのだ。「先生」はあせってしまったのだと思う。それは，「精神的に向上心のないものは馬鹿だ。」と言った，「先生」の言葉にも含まれていると思う。Kの，道のために凡てを犠牲にすべきだという，彼の信じる第一条にそむいたはかない恋も，「先生」のこの侮蔑と利害のためだけの冷たい言葉によって，終りを告げることになる。そして，Kは，人生にも終りを告げたのである。「もっと早く死ぬべきであったのに，何故今まで生きていたのだろう」という遺書とともに，自らの手で。

この時，「先生」は，はじめて本心にもどった。そして，自分も，自分を裏切って財産を横領した叔父と同じ人間だということを知ってしまったのである。自分自身をも，あきれて，信用できなくなってしまったのである。この世でたった独りになったときから，頼りにするものは，自分自身しかなかったのに，それすらも失くしてしまった「先生」は，その罪を人に打ち明けることすらできなかった。

それは，臆病とか，逃げるとか，そういう風に，簡単に解決できる問題ではなかったのであると思う。

「先生」はなにもかも打ち明けて，軽蔑され，どうせなら，憎まれた方がよっぽど楽だと思っていた。けれど，その過去の事実を打ち明けるには，「先生」の愛したお嬢さんは，あまりにも清らかで，美しすぎた人であった。

「先生」の苦しみがどんなものであったのか，それは，僕にはとうてい理解できるはずもないが，それは，自己の矛盾との激しく，つらい戦いであっ

たろうと思う。そして，その自己の矛盾は，「先生」だけでなく，お嬢さんをも，不幸にしてしまうのである。

「先生」を"死"に追いやったのは，あるいは，この矛盾ではないだろうかと思う。二つの，自分では，どうしようもない想いが，「先生」をがんじがらめにして……。

僕には「先生」の想いや，哀しみが痛い程よく解かる。人に裏切られ，自分自身にもイヤ気がさして，生きているべきではないという淋しい思いが……。

人間は残酷であると思う。残酷だからこそ，人間なのかもしれない。

この物語の題名ほど，この物語の内容にあう題名はないだろう。人間のおろかな心，淋しい心，自分ではどうしようもない矛盾，それを「先生」を通して，夏目漱石はうったえたかったのだと思う。

「氷壁」を読んで

工業化学科　2年　猪　坂　哲　次

「氷壁」は，難所に挑む二人の若き登山家の美しい友情と，一人の女性をめぐる恋愛のからみ合い，この二つがこの小説の中心的役割を果たしている。

主人公の魚津恭太の親友の小坂乙彦は，人妻である八代美那子を愛してしまった。しかし彼女はそれを拒否した。そしてその後小坂は難所前穂高で不慮の事故死を遂げる。いってみればこの小坂の事故の原因がこの物語の最大の関心事であるが，作者はこのことについては何も明らかにはしていない。ザイルが切れたのか，それとも小坂の自殺か，この物語を読んだ人は皆，それぞれ自分の考えを持っているだろう。その一人である僕はこのように考えた。小坂が転落した時，彼は魚津と一本のザイルでお互いの体を結んでいたにもかかわらず，魚津に衝撃を与えることなく落ちていった。この時点で僕は，小坂は自殺したのだろうと思っていた。魚津は，小坂はどんなことがあっても登攀中に自殺をするような男ではない，と言ったが，「小坂は自殺した」と頭から決めている僕には，小坂は魚津が考えていた程の男ではないのだろうと思った。そしてザイルの実験での結果は更に二人の立場を不利にさせた。しかし僕の考えは，小坂の遺体発見の頃から少しずつ変わり始めた。そして，小坂の体に巻きついていたザイルの切口の実験の結果が出た時には，「小坂は事故死だった」に変わっていた。しかし，小坂は八代夫人との交際を断わられてから，もういつ死んでもいい，という気持ちが，わずかでも小坂の中にあったのではないだろうか，とも思った。

さて，この物語では，魚津も八代夫人を愛してしまうわけだが，彼の場合は小坂の妹と結婚するために，八代夫人の幻影を払いすてようと登攀するが，落石にあい，事故死する。結局彼女は間接的ではあるが，この二人の登山家の死にかかわっている。正に彼女は魔女的存在である。

この物語は結局小坂の死の原因を明らかにしないまま終わってる。僕は，これはまるで謎解きのない推理小説のようだと思った。しかもそこには，トリックも殺人犯もない，どこかで現実に起こりそうな話だった。

今，この物語を読み終えて，もう一度，この本の表題である「氷壁」という文字を見て，この言葉の意味を考えてみた。

「氷壁」－その字の通りに解釈すれば，それは二人の登山家が登った前穂高の「氷の壁」である。しかし，ただそれだけだろうか。僕は「氷壁」を、こう解釈してみた。二人の登山家にとって，冬の前穂高は「氷壁」であったに違いない。しかし，彼らにとって本当の「氷壁」だったのは，二人を恋愛という対象で苦しめた，あの八代夫人ではなかったろうか。

高　瀬　舟

工業化学科　2年　奥　平　佳　江

苦しがって死にたがる人を殺してもいいのかと問われたら，絶対答えはNO！　一般常識・一般道徳ではそれがあたりまえである。誰にだって生きて欲しいと思う。死ぬことなんて考えて欲しくないと思う。生きてさえいてくれたらと。

弟殺しと言われた善助の行為は，私にはそれほど悪いという感じはしなかった。人を殺しておいて悪くないと思うのはおかしい。そう言われるかもしれない。しかし，その時，善助にとってどうすることが一番よかったのだろう。善助の立場におかれた時に……。喉から息がもれ，血だらけになって殺してくれと苦しんでいる弟を見，冷静になれるだろうか。冷静じゃないから殺せたというのでもない。殺すという言葉もあてはまらないように思う。冷静だったからといって，瀕死の弟の手当てができるわけでもない。でも，息が絶えるまでただ見守るだけなんてとても辛すぎる。いっそ……。と思ってしまうのは，人間の心では仕方

がないとしかいいようがないように思う。決して足手まといだなんて思っていない。いつか，早く良くなることを思ってきたのに。生きることを止めてしまった弟にどんなことをしてやるべきなのだろう。とても難しい。

この彼の行為は，良し悪しの問題では片ずかない。でも彼はどう裁かれても，お上のおたっしだからと受けとめると思う。何も考えずにただ自分が悪いことをした。と罪を悔いているからではないように思える。彼にだって自分のしたことをどう思ったらいいのかわからないのだろうから。あの時，弟は，目で殺してくれと言った。自分から死にたいと言った。あの苦しさを長く続けさせることはできない。との思いでいっぱいだったから。当事者でない者は，いくら苦しんでいたって，殺してくれといったって，人を殺してはいけないと思うだろう。それはそうだ。苦しそうだからの思いで殺してやる。いや，安楽死を与えてやることは，決して許されないことだ。

そこで，どうしてこの行為が許されないのだろう。どうしてそうしてやることは罪なのだろうと作者は考えさせてくれる。安楽死をさせてやるなんて思うことは，普通はとても悪いことだと思う。恐ろしいことだと。どうしてと考えねばならなくなる。人の命のこと。時に人は死に対して恐怖が先にたつ。死んでしまったら，思い出が残ると言われたって，ちっともよくない。もう生きることができない。それが悲しい。死を選んだのはどうしようもなくなったからと言うかもしれない。人人にとってそれは甘い考えだ。苦しいから辛いから，そこから逃れるなんてずるい。死ぬのは寿命と運命。自殺は運命なんかじゃない。自殺はいけない。いけないがしてしまった人を苦しみながら助けてやった者はどうしよう。

余裕のない毎日。喜助にとってその日その日，決してみたされることはないはず。たったの二百文に対して，牢屋のまずい御飯に対して，働かずにこんなにいただけるだけで，ありがたいと素直に思う。遠島にされても，ちっとも苦になってはいない。そんな善助はどんな罪にも処されるべきではないのかもしれない。その刑がどれほどの意味を持つだろう。

喜助は弟の苦しみを見すぎてしまった。仕方がないですまないことではあるのですが，どうしても喜助という人物を悪く思うことはできなかった。現代にも，生か，死かと言われる，脳死の問題がある。どちらを選ぶべきかまだわからない。もっと考える必要があると思った。時の中で流されてしまわないようにしたい。

「それから」を読んで

工業化学科　2年　野　崎　竜　也

この作品は漱石三部作の二作目のものである。前作の「三四郎」に続き後の「門」に帰着する。この「それから」は，なにについてもそれからという意味になるだろう。内容は，今で言えば，不倫ものであり，この時代で言えば愛の苦悩である。相手は友人の妻であり，その友人のために二年前女を譲った。主人公は代助，女を三千代，友人を平岡と言う。この作品の終わりは，親に勘当された代助が，電車に乗る場面である。最後まで読むと，代助と三千代は，どうなるか。そしてまた平岡は一人になるのか。といろいろな意味においてそれからどうなると興味を持たせる。僕としては，代助と三千代がどこかでひっそりと暮らし，平岡は，独りで一生を終えるという展開を望みたい。でもこういうことは世間で認められないことだろうし，してもいけないだろう。だけどいつまでもこの状態ではいけない。結局代助が妻をめとり，平岡と三千代が平穏に暮らすのが良いのだろう。だけど代助にすれば妻をめとらないのは，三千代に対し罰を受けているからだ。この辺りが昔のセンスであろう。この作品の文章は，美しい文句や奇抜な形容詞で表現される。この表現は，僕は好きである。代助の三千代に対する口説き文句が，「今の僕の存在には君が必要だ。」である。今の僕には，こんな吹き出すような台詞は言えないが，もっと大人になったら言えるようになりたい。その場面一つ一つにも巧みに美しい文句が並べられている。今の小説は，場面一つ一つ細かく忠実に描かれている。まさに正反対である。だが逆に場面が想像しにくいという欠点があるのではないかと思う。実際読んでみて，分かりづらいところがあった。それに不自然さが残っている。人間と背景が一致せずに台詞が流れる。美しい文句が故に不自然さと不明さが残る作品であると思う。

僕が最も感銘を受けたのは，やはりクライマックスと思われる代助の三千代に対する告白の場面と，代助の平岡に対し謝罪する場面と二つである。一つ目の告白の場面下は代助が切々と美しい文句で三千代を包みこむ。それに対する三千代の対応が不自然さは残るが美しい。同時に男と女をまじめに考えさせられた。最近この手のドラマが放送されているがそれと比較すると昔の方が罪悪感を

感じさせない。二つ目は，この作品の主張が描かれていると思う。社会という歯車を抜け，好きなものは好きと，マイウェイを突っ走る，という，いわば人間は自然に帰することが大切であり，むしろ失ってはいけないものである。と同時に僕たちにあてはまるのではないかと痛感した。古き良き時代に戻るという言葉があるがまさにその通りである。でももう戻れない。規律やルールが常識である今，愛だけを貫くことはできない。僕も代助のように愛を貫き，自然に帰してみたい。なかなか奥の深い味わいある作品であったと思う。

「敦煌」を読んで

土木工学科　2年　大　竹　浩　二

この小説の舞台は，宋本土から切り離された漢民族の小島であるこの都市国家が，西夏に滅ぼされるところである。そしてその周囲にはタングート，ウイグル，吐蕃，漢民族その他いろいろな民族の興亡がある。歴史の中のこの部分について，教科書では3行，参考書では7行程度。どちらも西夏についてだけで，それに滅される涼洲，甘洲，沙洲(敦煌)のことなどはのっていない。この教科書にないところに，一冊の本になるほどの出来事があるのだ。私はそこに歴史の奥深さを感じた。

教科書，参考書では，中国本土のことは詳しくあるが，その周囲の北方西方南方の民族についてはこのようにながしている。僕は，図書館の近くへ出かけた時，ついでに，調べてみました。そしてこの歴史をみて，歴史の連続に感心しました。

朱王礼は西夏軍の前軍，漢人部隊の勇猛な武将である。彼は漢人なのに，戎夷の西夏のために働いているわけだ。が，彼は目をらんらんと輝かせ，凄絶な戦を求めて駆けまわり数々の武勲をたてている。もちろん，彼もくやしいわけで，人知れず西夏をやっつけようとずっと考えていた。私はこれは本当にずっとだと思う。そして私は彼がアニメに出てくる悪役の感じもした。しかも自分を恥じて自害したりしなかった。これは，かなりの，度胸と勇気がいると思います。それと，彼の武勇の根にある漢民族の誇りだろう。結局彼は反乱に失敗し，この町の兵とともに壊滅した。

主人公である趙行徳は科挙の受験生から朱王礼の部下となりこの西の果てまで来てしまう。僕はそれが自然のなりゆきだと思うし，彼も心の赴くままに動いてきたと思っている。ただ，戦闘を何度か経験して，朱王礼も舌を巻くぐらい死を怖れぬようになるのを除いてだが。自然に，といってもそれらは偶然がいくつも重なったものだと思う。だから一つでも狂ったら，甘洲でウィグルの王女を見つけなければ，彼が仏教にひかれなかったかも知れないし，朱王礼も反乱をおこさず，従って千仏洞の数万の経典は存在しないかも知れないし，行徳がもともと開封で西夏の女に出会わなければ，いや試験で居眠りさえしなければ，彼は高官について西夏を攻撃する役についていたかも知れない。まあ人生はこういう偶然のつみ重なりなのだろうか。最後になんか久しぶりにおもしろい小説を読んで感動しました。

井上靖著「氷壁」を読んで

土木工学科　2年　宮　崎　有希子

私は，この本を読んだ時ほど，「登山」というものがこれほど遠くに感じられたことはありません。今までスポーツとして見てきた私には，あまりにも高貴で，あまりにも厳しすぎるのです。

物語は，主人公の魚津恭太が一人山から帰ってきて，再び都会の喧噪の中に引き戻されるところから始まります。その後すぐに彼は，親友の小坂乙彦と，彼の恋人八代三弥子に出会います。人妻である美弥子を愛してしまった小坂をどうしてやることもできずに，二人は奥穂高の難関に挑んだのでした。そこで小坂は，切れる筈のないナイロン・ザイルが切れて，魚津の目の前で墜死してしまうのです。それから魚津は事件究明に努力します。

私は，小坂が死んでしまった後の魚津の行動に強い感動を覚えました。自殺説の流れる中，彼は小坂の誇りにかけて，山で死のうとするのは登山家ではないと，主張します。彼らは親友と言っても，「山」を目標としているだけで，お互いに，山以外のことはほとんど知らないのです。それだけに私は男の友情というものに魅かれました。また，八代美弥子についてもそうです。彼女に思慕を抱きつつも，小坂の妹かおるとの結婚を決心します。かおるは，魚津が美弥子に恋しているのを知り，無理に結婚しなくていいと言いますが，二人の，

「僕は結婚しようと思ったら，結婚しますよ。」

「愛そうと思ったら，愛して下さいますのね。結構ですわ，それで。」

という短い会話のやりとりの中で，総てを決意します。でもこの中に，二人の悲しい心情が隠されているように思えてなりません。

最後に，魚津は一人，穂高に登ります。かおるとのことを小坂に告げるために，そして事件に終止符を打つために……。

ラストはとても語れません。読み終えた時，思わず身動きできないほどの感動を受けてしまったことは確かです。

兄の本棚の中から，何気なく手にした一冊が「氷壁」ですが，これを読書感想文の素材として選ぶのには，私の表現力と感受性がまだまだ及びませんでした。ただ一つ理解できたことは，魚津恭太は勇気ある青年だったということです。彼は敢然として立ち向いました。自然の氷壁へ，そして人間の氷壁へ―。

「あすなろ物語」を読んで

土木工学科　2年　馬　目　珠　江

井上靖の『天上の星の輝き』を学習した際に，いつか先生が，「是非『あすなろ物語』も読んで下さい。」と，勧められたことを思い出して，迷わずこの本を手にしました。

"あすなろ"という木の名前は耳にしたことがありますが，この名のいわれなど，気にも留めませんでした。ひのきに似ていて，あすはひのきになろう，あすはひのきになろうと念願しながら，ついにひのきになれないということから"あすなろ"という説話には，「なるほど，うまく考えたな。」なんて思いました。が，今読み終わってみて，それはなんて哀しくて素晴らしいことだろうと，考え直したところです。

幼少年時代，青春時代，社会人駆け出しの頃，戦争中の壮年時代の一時期など，これまでそれぞれの時期に出会った六人の女性とは，梶鮎太にとって……。例えば<深い深い雪の中で>に登場した冴子。祖母と二人っきりの生活の中に突然現われ，突然の死。幼いながらに少年の心には，複雑なショックを与えられたことでしょう。また<寒月がかかれば>の雪枝は，殴った相手とけりをつけたり，鉄棒で鍛えさせたりするような明るくたくましい女性です。

鮎太が出会ったのは女性ばかりではありません。明日を夢みる学生達の思い，新聞記者として競争相手の出現。そんな風に，接した時期や，性格は人それぞれ，全く違っていますが，彼の人生の中で，いろいろ教えてくれた人々にはちがいないと思います。そして，誰もが皆，何かを求めて，何かのために生きている"あすなろ"だと私は思います。

私は今，十七歳。ごく普通の家庭で育ち，友達がいて，悩みも別になく，生きています。梶鮎太のような心に残る数々の出会いが，私にとってあったでしょうか。また，これからあるのでしょうか。人と出会うことは，人間にとって大切なことだと思います。接した人によって，考え方や生き方について，考えさせられることがあるだろうし，自分を見つめ直すことが出来ると思います。そんな素敵な出会いを待ちたい，大事にしたいと思います。そして，私は，"あすなろ"いや，ひのきになれるようにがんばろうと思います。

昭和62年度学生卒業研究一覧

◆ 機械工学科

研究テーマ	学生名	指導教官
銅めっき箔による応力測定	小池 正紀，戸井田 淳 箱崎 充丘	佐藤(顕)
新しいキーみぞを有する軸のねじり強さ	岸 泰成，渡邊 修司	佐藤(顕)
ガソリン－メタノール混合燃料を用いた火花点火機関の燃焼に関する研究Ⅰ	矢内 智，吉田 雄一 吉成 和彦	窪田
ガソリン－メタノール混合燃料を用いた火花点火機関の燃焼に関する研究Ⅱ	佐藤 幸男，矢部 義明 吉田 光生	窪田
うず巻ポンプの特性について	泉 貴倫，加藤 明 斉藤 晃央，結城 広之	中山
曲管の損失について	藤田 悟史，堀池 伸和	中山
パソコンによる境界要素解析	大川原信幸，鈴木彰一郎	佐藤(憲)
光弾性による二次元応力解析	足立 剛志，園部 章 渡邊 隆	佐藤(憲)
ロボットハンドの製作と制御	一條 賢仁，小林 健 島田 章広	石垣
パソコンCADの機械要素設計用ソフトの開発	阿部 幸雄，三春 毅	石垣
学校保健管理ソフトの開発	鈴木小百合，髙田 幹郎	石垣
NC旋盤用CAD／CAMシステムの開発	斉藤 満，富塚 勝幸	松本
教育用多関節ロボットのティーチングボックスの製作と制御ソフトウェアの開発	久保木正喜，門馬謙一郎	松本
教育用多関節ロボットのティーチングプログラムの開発	土棚 栄敏	松本

◆ 電気工学科

研究テーマ	学生名	指導教官
誘導M型低域ろ波器の設計とその特性	雅楽川 剛	渡辺(喜)
アクティブ・フィルタの設計，製作およびその特性	坂内 弘幸	渡辺(喜)
PCM磁気録音用プロセッサの製作とその特性	藤井 裕人，本田 育義	渡辺(喜)
ディジタル・ビデオ・エフェクタの設計と製作	大内 訓，宗像 顕夫 村越 豊	山崎
磁気記録再生ヘッドの特性と評価	草野 弘之，根本 和幸	奥村
磁気記録媒体の特性と評価	鈴木 宏佳，渡辺 学	奥村
各種テープの環境条件の変化による電磁変換特性	相原 正巳	奥村
トラッキング劣化の放電時における発生雑音の検討	榎本 孝英，佐藤 寛	鴨沢
有機絶縁材料のトラッキング劣化と分子構造との関連性	木幡 仁，小山 晃広	鴨沢
モデル装置によるトラッキング劣化の放電の検討	斉藤 利幸，鈴木 秀一	鴨沢

研究テーマ	学生名	指導教官
紫外線照射のエポキシ樹脂のトラッキング劣化への影響	穴沢　和士	鴨　沢
低周波周波数分析器の試作と特性	高橋　徹，早川　誠一	奈　良
高温超伝導物質の試作	高橋　徹，早川　誠一	奈　良
直流マグネトロンスパッタ法によるZnO圧電膜の作成条件に関する検討	阿部　正人，佐藤　学	渡　辺(博)
圧電すべり効果を用いたエッジモード共振子の理論解析とその応用	相良　理一，高橋　道弘	渡　辺(博)
シリコン太陽電池の特性と評価	村田　光司	渡　辺(博)
走行安定性を向上させたマイクロマウスの製作	鴨田　久兵，吉田　泰則	春　日
重み1の数系に基づく直列加算回路の論理的なノイズ試験	田久　幸司，諸橋　幸扶	春　日
XYZ 3軸制御システムの設計と製作	佐藤　敏幸，長谷川徳雄	村　田
パソコン用高速データ集収装置の設計	橋本　孝寿，渡部　敬介	村　田
パラメトリック発振を利用したDC－AC変換器に関する研究	阿部　勝行，小林　幸二	岡　沼
二鉄心形電力変換装置に関する基礎研究	糠澤　明宏，町田　弘志	岡　沼
耐熱性ポリマーフィルムの絶縁破壊に関する研究	阿部　和彦，石本　善治	伊　藤

◆ 工業化学科

研究テーマ	学生名	指導教官
電気伝導度法によるヘキサアンミンコバルト(Ⅲ)およびトリス(エチレンジアミン)コバルト(Ⅲ)錯陽イオンと塩化物イオンとのイオン会合定数の決定	佐久間　敦	高　橋
D.Cポーラログラフ法によるイオン会合定数の決定	堀内　保	高　橋
イオン対形成反応に及ぼす錯陽イオンの影響 －中心金属イオンならびに配位子－	渡辺　健一	高　橋
ZnO微粒子表面への炭酸ガスの吸着に関する研究	阿部　克明	大　隈
ZnO微粒子の酸性度・塩基性度に関する研究	奥田　明子	大　隈
長波長域で光電導を示すZnO－色素系の研究	高橋　隆夫	大　隈
ZnO微粒子の表面化学吸着酸素に関する研究	鶴山　祐正	大　隈
RF－スパッタリング法によるZnO薄膜の合成と評価	大内　浩之，伏見　伸一	内　田
ヘビノネゴザの重金属有機化合物の抽出・単離・構造解析	笠原　康弘，本村　健治	金　田
イネ中の重金属有機化合物の抽出・単離・構造解析	斉藤　利之，松崎　義春	金　田
イネ中のカドミウムおよび銅有機化合物の抽出・単離・構造解析	岩間文枝，酒井直志，柴崎輝隆，新妻秀樹，半沢公一	引　地
フェニルチアゾール環を含むポリアミド及びポリイミドの合成	馬上　忠昭，山野辺昌人	井　上

研究テーマ	学生名	指導教官
ペルフルオロアルキル基を有するポルフィリン及び金属錯体の合成と性質	沖名　淳	青　柳
N－アルキルポリフィリンコバルト(II)錯体及びそれらの再構成ミオグロビンの合成と性質	小林　茂	青　柳
ポルフィリン有機金属化合物の合成と反応性	平子ゆかり	青　柳
エステル交換反応におけるランタノイド酢酸塩の触媒活性	坂本　和子	伊　藤(正)
エステル交換反応における酢酸塩としゅう酸塩の触媒活性	曽我部幸蔵	伊　藤(正)
Y－Ba－Cu－O系高温超伝導体の研究	市川　賢一	伊　藤(宏)
ZnO微粒子表面への酸素ガスの吸着に関する研究	樋口　雅一	伊　藤(宏)
セリウム系ガラス研摩材の研究	平井　克典	伊　藤(宏)
大気粉塵中の多環芳香族炭化水素の分析	水野久美子	伊　藤(宏)
UNIFAC式による活量係数の推算	猪狩　克彦	大　沢
BASICによる分子の構造解析	四釜　祥弘	大　沢
旋回流式曝気槽の流れ状態の測定に基づく流路の決定	篠原　強	大　沢
UNIFAC式のパラメータについての考察	山辺　晋	大　沢

◆ 土木工学科

研究テーマ	学生名	指導教官
Levinson はり理論の伝達マトリックス法を用いた数値解析と精度特性	湯田　宏行	根　岸
Levinson 理論に基づく要素を用いたはりの有限要素法解析	横田　武	根　岸
床組使用の経済性の検討	安斉　恵吉	土　居
夏井川に架る橋の歴史的・技術的考察	磯上　和重	土　居
鋼構造の限界状態設計法に関する研究	佐藤　公一	土　居
Saint－Venant 方程式の厳密解について	添田　信	官　野
清水中に放出された濁水の挙動について(現地観測を基にして)	豊島　正美	官　野
メッシュ法による新川の流出量の算定	山岸　和宏	橋　本
新川流域の汚濁発生負荷量の推定	会田　一美	橋　本
タンクモデル法による新川の流出解析	佐藤　孝之	橋　本
新川における自浄作用の検討	矢吹　高	橋　本
新川の親水性に関する一考察	松本　昌文	橋　本
いわき市における地盤情報のデータベース化の試み	熊坂　敏明	佐　藤

研究テーマ	学生名	指導教官
軟岩ずりの締固め特性に及ぼす粗粒分の影響	富田　征司	佐藤
液状化試験における間げき水圧の発生と消散	鈴木　修二	佐藤
小名浜地区における液状化の予測について	飛田　茂	佐藤
耐震設計における入力地震動に関する考察	松本　浩文	佐藤
大規模自転車道の計画	穴沢　雅昭	高橋
ネットワーク手法による工程管理	星　透	高橋
中心市街地の街路網に関する研究	矢島　竹弥	高橋
中心市街地における街路景観の設計	長浜　ミホ	高橋
都市の活性化と駐車場整備	生田目秀樹	高橋
PCによる三角点網の計算と作図	橋本　武	高波
限界状態設計法の移行に関する検討及びそのプログラム作成	赤津　教子	志賀
RC部材の限界状態設計法における安全性の照査に関する研究	鈴木　誠	志賀
かき氷コンクリートにおける強度・品質についての研究	小久保　弥	志賀
かき氷コンクリートの低温養生における圧縮強度特性	薄葉　淳	志賀
いわき地区における骨材の調査および研究	柳内　博光	志賀
いわき地区における山砂利・石材の調査および研究	塩田　広勝	志賀
コンクリートの一軸圧縮試験時の諸条件がAE発生特性に及ぼす影響	馬上　弘紀	山ノ内
凍結融解をうけたコンクリートのAEによる損傷度評価の研究	小林　克久	山ノ内
応力履歴をうけたコンクリートのAEによる損傷度評価の研究	浜津　純	山ノ内
エンドクロニック理論のコンクリートへの適用に関する研究	平塚　透	山ノ内

お知らせ

1. 利用し易い図書館に

(1) 「新着図書案内」

昨年11月から「新着図書案内」を発行している。1ケ月ごとに新着図書を案内するもので，学生課前の掲示板と図書館の掲示板に掲示している。又，新着図書を図書館1階書庫の入口近くに新設した「新着図書」架に配し，利用し易くした。案内された新着図書が，できるだけ多くの学生諸君に，できるだけ早く利用されることを期待している。

(2) 卒業研究報告書コーナー

昭和61年度の卒業研究報告書を製本し，図書館閲覧室の卒業研究報告書コーナーの書棚に収納した。各科のカラーの表紙で4～10分冊となっている。館外帯出はできないが，館内では自由に閲覧できる。

なお，62年度の報告書についても同様に製本，収納するように進められている。

後輩の学生諸君が積極的に活用することを期待する。

2. 新視聴覚教育設備

視聴覚教育教室を利用する授業が増加したので，階段教室に新しい視聴覚教育設備が設置されることになり，鋭意その準備が進められている。新設備にはAV新時代にふさわしく，大画面（100型）のS-VHS方式ビデオプロジェクターをはじめOHP 2台，スライドプロジェクター，デイジタルビデオカセットレコーダー，レーザディスク，CDプレーヤーなどがある。

設置工事は3月中に完了し，新年度から利用できる。

館　長